

世界は発狂——極左、無神論、怨嗟、脅し、破壊、暴力

根本的に何が狂っているのか？

Greatchain

2020/08/24

NeonNettle の今朝の最新情報に、ナンシー・ペロシの大写しの顔と共に、「Nancy Pelosi: Trump Is Fiddling While 'America Burns' = トランプは〈アメリカが燃えている〉というのに、のんきなものだ」という見出しがついている。なるほど、これはわかり易い言葉である。ペロシならきっとそう言うだろうと思わせるもので、トランプには、もっと慌ててほしいと思っているようだ。本当は「アメリカが燃えている」のでなく、ある者がアメリカに火をつけているのである。

その「脅し」とは何かを説明するなら、それは「我々の命令通りに COVID-19 の対処方を、おとなしく実行しなければ、全員が死ぬぞ、それでもいいのか？」という、あの有力医師団の脅しがそれに当たる。

この他に、現在ここに載っている記事をいくつか紹介すると——

- * 「暴力的左翼が、静かな郊外にギロチン台を持ち込んで襲い、米国旗を焼く」
- * 「バイデン支持者たちが、MAGA ハットをめぐる7歳のトランプ・ファンを襲い、逮捕される」
- * 「BLM がアメリカに警告：我々は許可があろうとなかろうと、何が起こるか言ったはずだ」（車がひっくり返されて燃え、「眼には眼を」という看板がある）
- * 「トランプが、大量の COVID-19 治療打開策を通知」
- * 「Don Lemon: トランプ支持者の〈カルト〉は、選挙前にデ・プログラミングが必要だ」
- * 「トランプ、民主党全国大会を批判して、〈4日間連続してアメリカへの攻撃が続いている〉」

その中で特に注目したい数日前の記事がある：——



「彼は素晴らしい人です」と、Michelle Obama は、有罪レイピスト犯人の Harvey Weinstein について語った

「素晴らしい人物」と、ハーヴィ・ワインスティーンを称える

ミシェル・オバマ

前ファースト・レディのミシェル・オバマは、月曜日の民主党全国大会で、トランプ大統領をひどく攻撃した、ちょうど1日後、ある2013年のビデオが浮上して、彼女が有罪レイピスト犯人のハーヴィ・ワインスティーンを、「素晴らしい人物」と褒めたたえていたことがわかった。

ミシェル・オバマは、月曜日に激しいことばを用いて、「ドナルド・トランプはわが国の間違った大統領です」と主張した。

その1日後に、オスカー賞にノミネートされた俳優で保守党の、ジェイムズ・ウッズが、前ファースト・レディが、この恥辱にまみれたハリウッドの大物を、褒めたたえているビデオを掲載した：——

「見事な証言が今夜、手に入った。彼女は人物を見る目がある。だから、どうか穏便に願います、あまり騒がないでね…」と、ウッズは皮肉を書いている。

彼女は、この人物の正体を知らなかったのかもしれない。しかし、よく知っていたとも考えられる。いずれにしても、この2人は、人間として引きつけ合うものがあったと思われる。これをナンシー・ペロシと比べてみることができる。今、このような人々の「人種」が世界的に盛んであり、彼らはトランプを、どうしても許せない人間として認識している。それは理屈ではない。今、そのような人間が、理屈抜きで、あたかも宗教的信念のように、

宗教を許せない人種として勢力を得ている（あの医師団もその一つ）。なぜか？ それにはその理由がある。

そこでもう一つ、InfoWars にこのような記事を発見した：——

トランプ：民主党は、民主党全国大会の間に、誓いの言葉から「神」という言葉を、故意に除いた

「神」という言葉は、重要な内容の決定をしたり、宣誓をしたりするときに、アメリカでは普通に使われる。特に神を信ずるトランプにとっては、重要なものである。その「神」を民主党が、わざわざ文面から除いたということである。これは彼らが「つけた火」の一つである。

いま何かが、世界で大きく起こっているとすれば、それは明らかに「宗教を許すな」という運動である。我々日本人は「宗教音痴」として知られるが、それは我々が宗教性を持たないということではなく、宗教をきっちり考えることができないということである。だからこの運動は、わが国でも、向こうの「指導！」通りに起こっている。アメリカのメディアは、キリスト教徒のトランプを馬鹿にし、ペロシのような人間に権威を持たせるように「指導」している。我が国のメディアも、その指導に従っている。この指導に強制力があることは、読者の方々がご存知の通りである。

またしてもそんな話をするのか、と多くの読者は思われるかもしれない。宗教などというものは、根本的に軽蔑されるべくして、軽蔑されているのではないのか？ と考える人も多いただろう。そういう人たちが考えているのは、たいてい、我々は唯物論科学によって保証された堅固な世界に生きており、その上に、いわばオプションとして、必須科目でない神や宗教がついている、というものである。

これは完全に間違った、180度ひっくり返った考え方である。これを例えば、昔のように「宗教の時間」などと称して、特別のここのように教えたりすれば、その誤解はますます大きくなる可能性がある。何がどう間違っているのか？

我々は創造者（神でもよい）と共にある、というあり方でしか、存在することができない。そのあり方を否定して、それに逆らって生きるなら、我々は生きること自体ができなくなる。また我々の世界は全体として、愛とか善とか「他者のために生きる」方向に向かって生きるようになっている。その反対方向を選ぶ者は、滅びるよりほかはない。サタンとは、「反逆者」の意味であることを知るべきである。いかに生きるかを離れた「中立の科学的

真理」などというものはない。「インテリジェント・デザイン」派の人々は、これまでの前提を改めることによって、新しい真理を次々に発見しつつある。

これはヒントであって教えではない。ここから次々と枝葉が生じ、だんだん生きた全体的真理へと、目が覚めていくかもしれない。私は知らない。そのようなものかもしれないと言うだけである。ただ要諦は、頭から「そんな馬鹿な」と言わないことと、「そんな馬鹿な」と言わせるように、我々の文化ができてきているということである。それは悪意から生ずるものである。

申し訳ないが、またしても同じ引用をさせていただく——ある問答番組のホストがこう質問した、「神とか、より高い現実というようなものが、実際に存在するのですか？」——この質問に一瞬きょとんとして、デイヴィド・ウィルコックが答えた、「There is what else? そのほかに何が存在する？」

あえて一つ予言をするなら、*The Law of One (Ra Material)* という本が重要性を増し、これを読み解説することが、近い将来、知識人の間で広く行われるものとする。